



特10
693

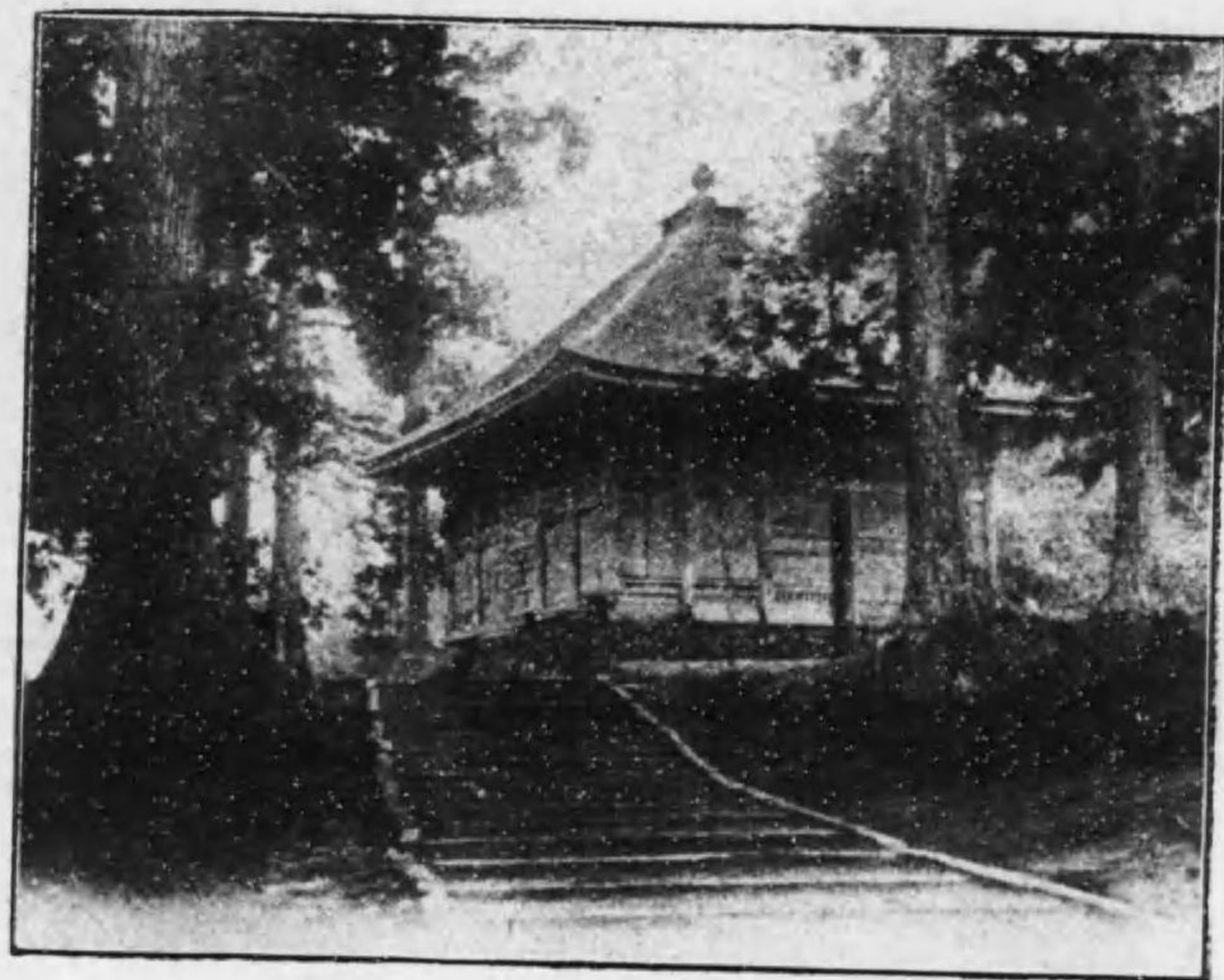
平泉小誌



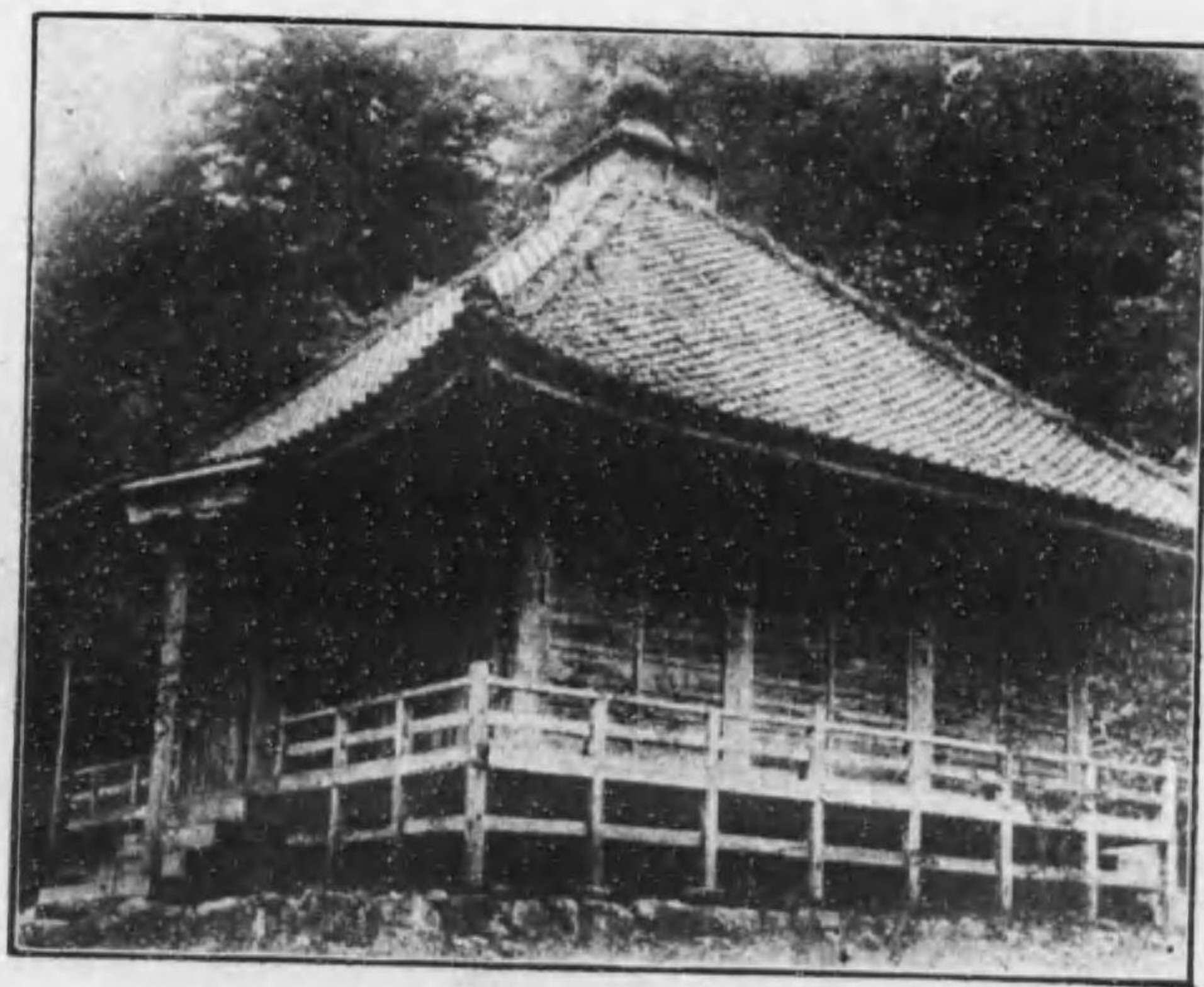
始



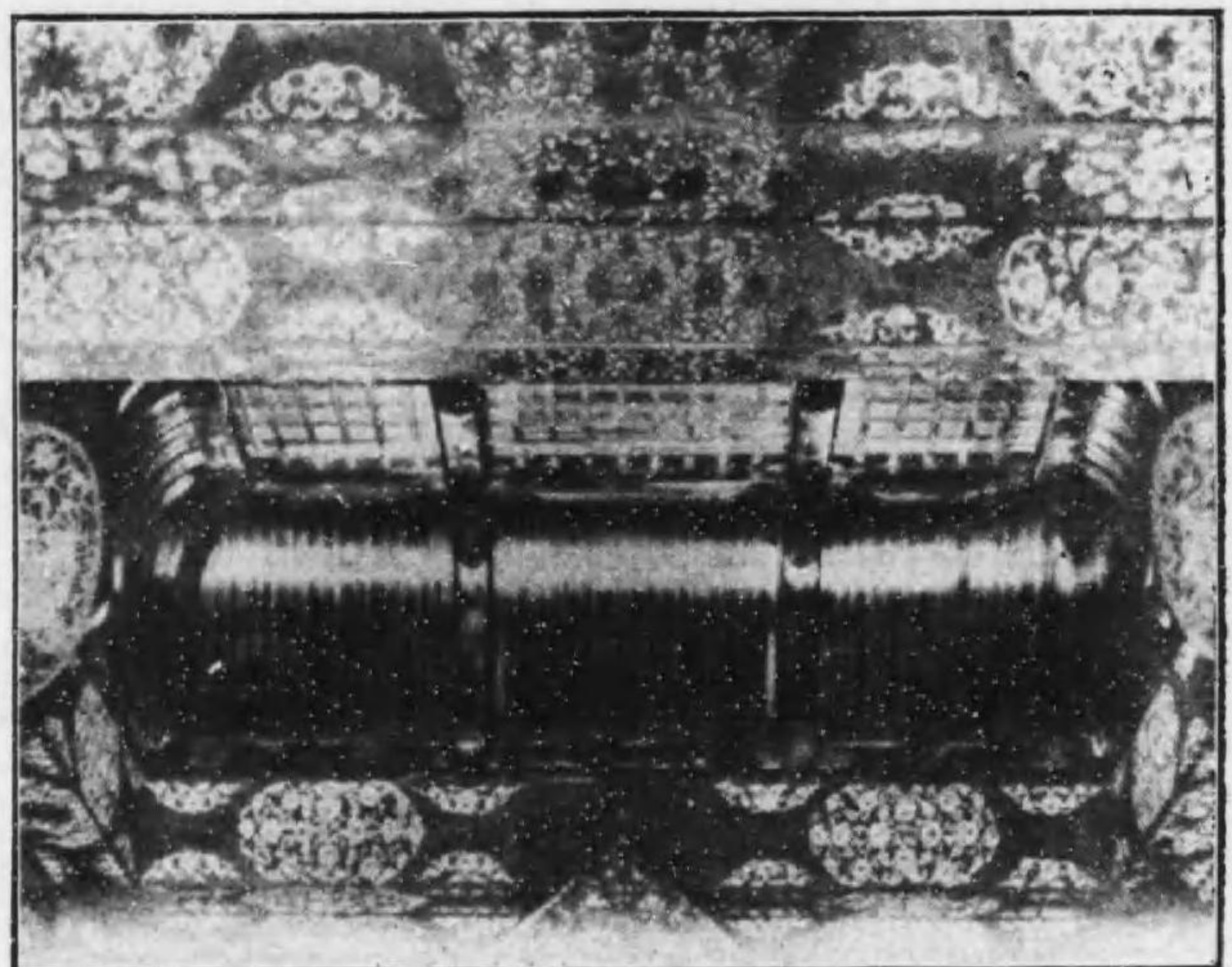
特110
693



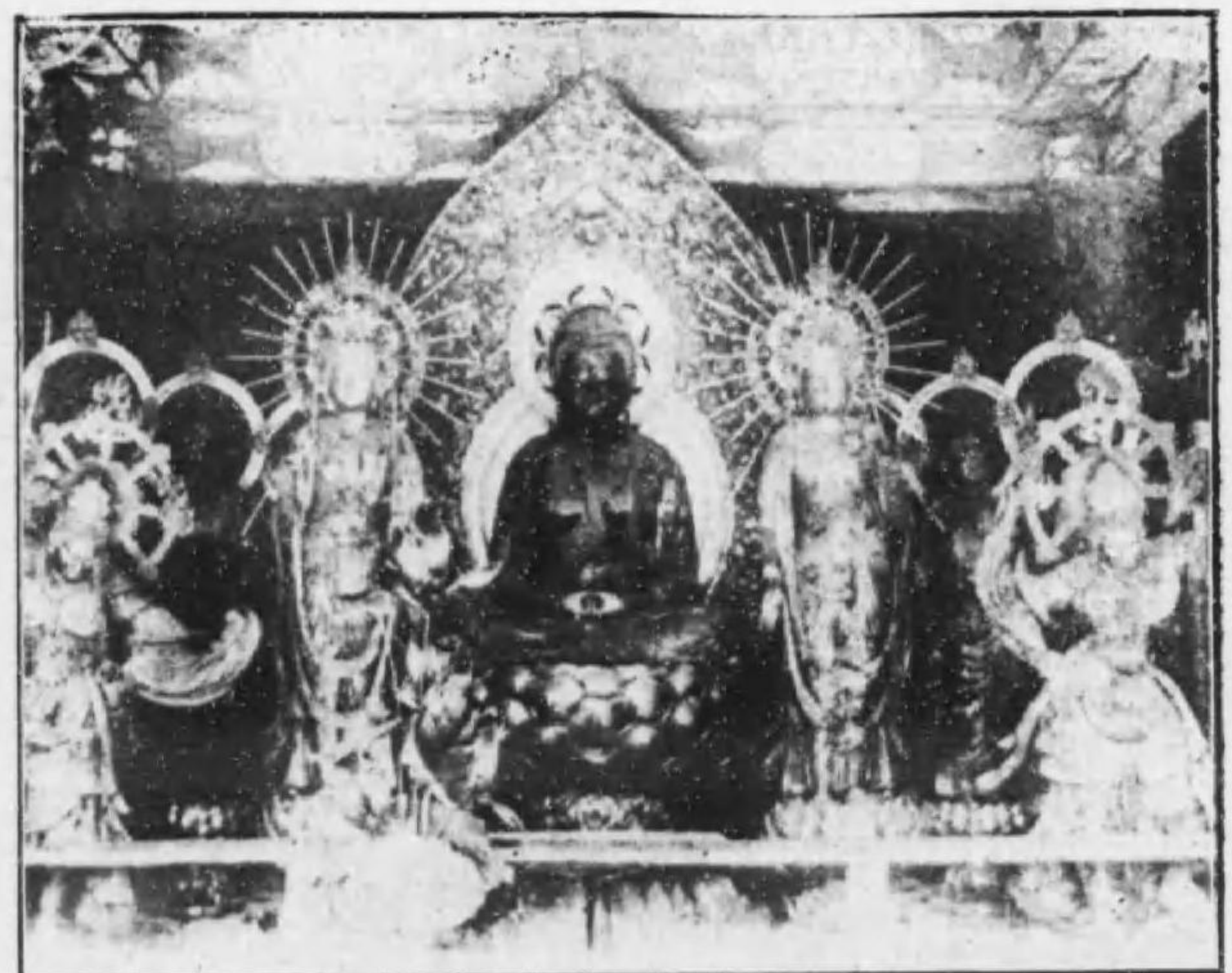
特 別 國 寶 金 色 堂



經 藏

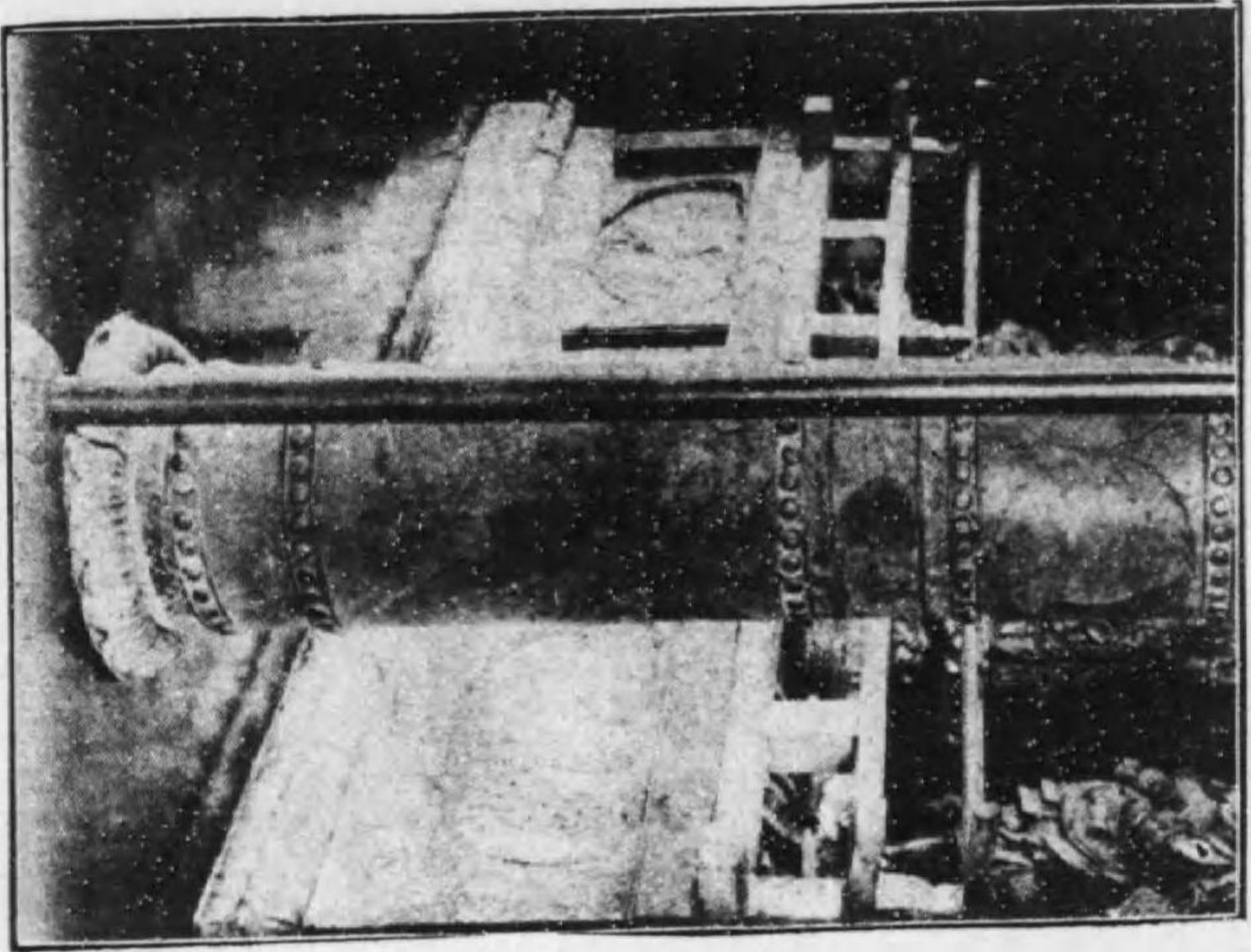


金 色 堂 内 部 螺 鈿

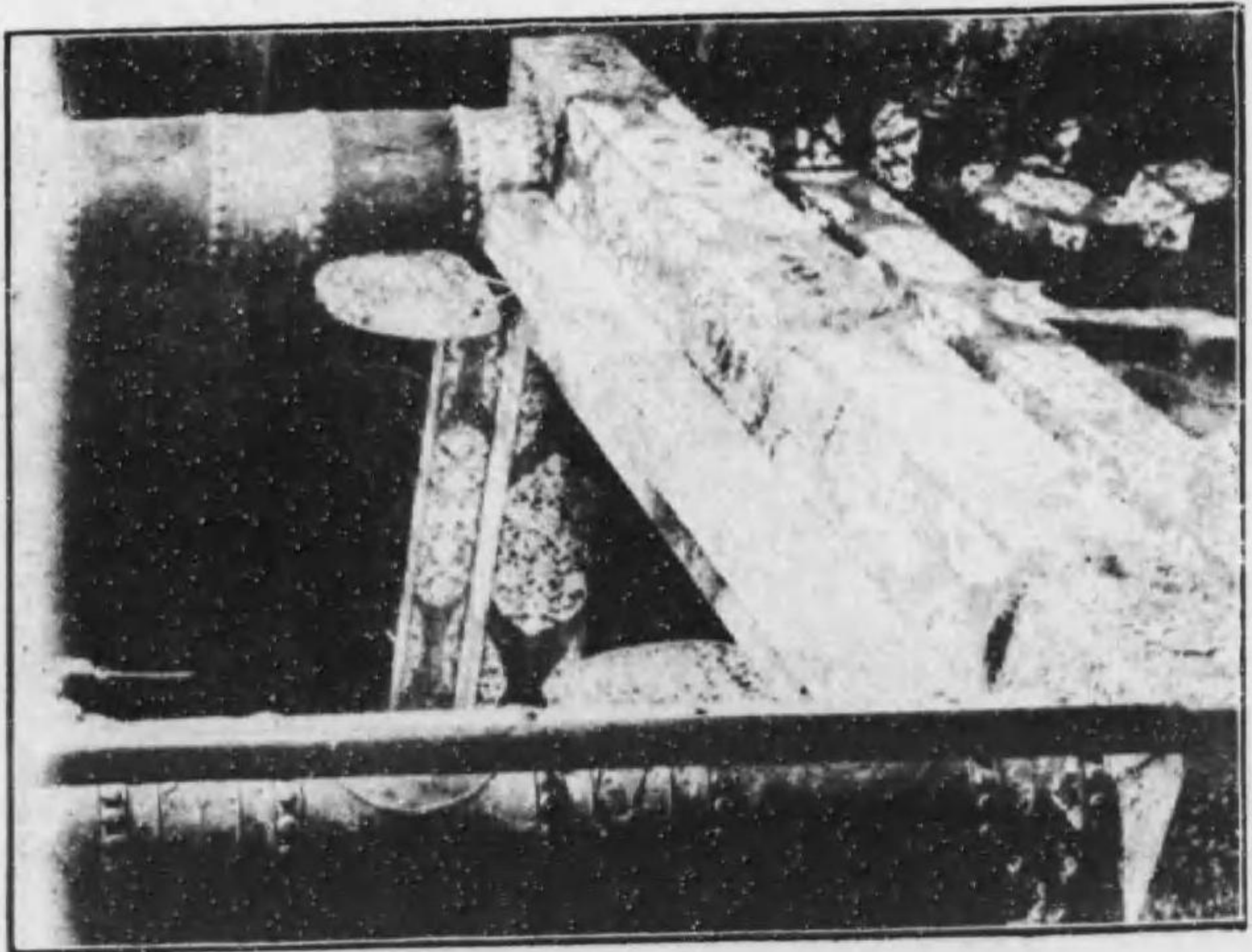


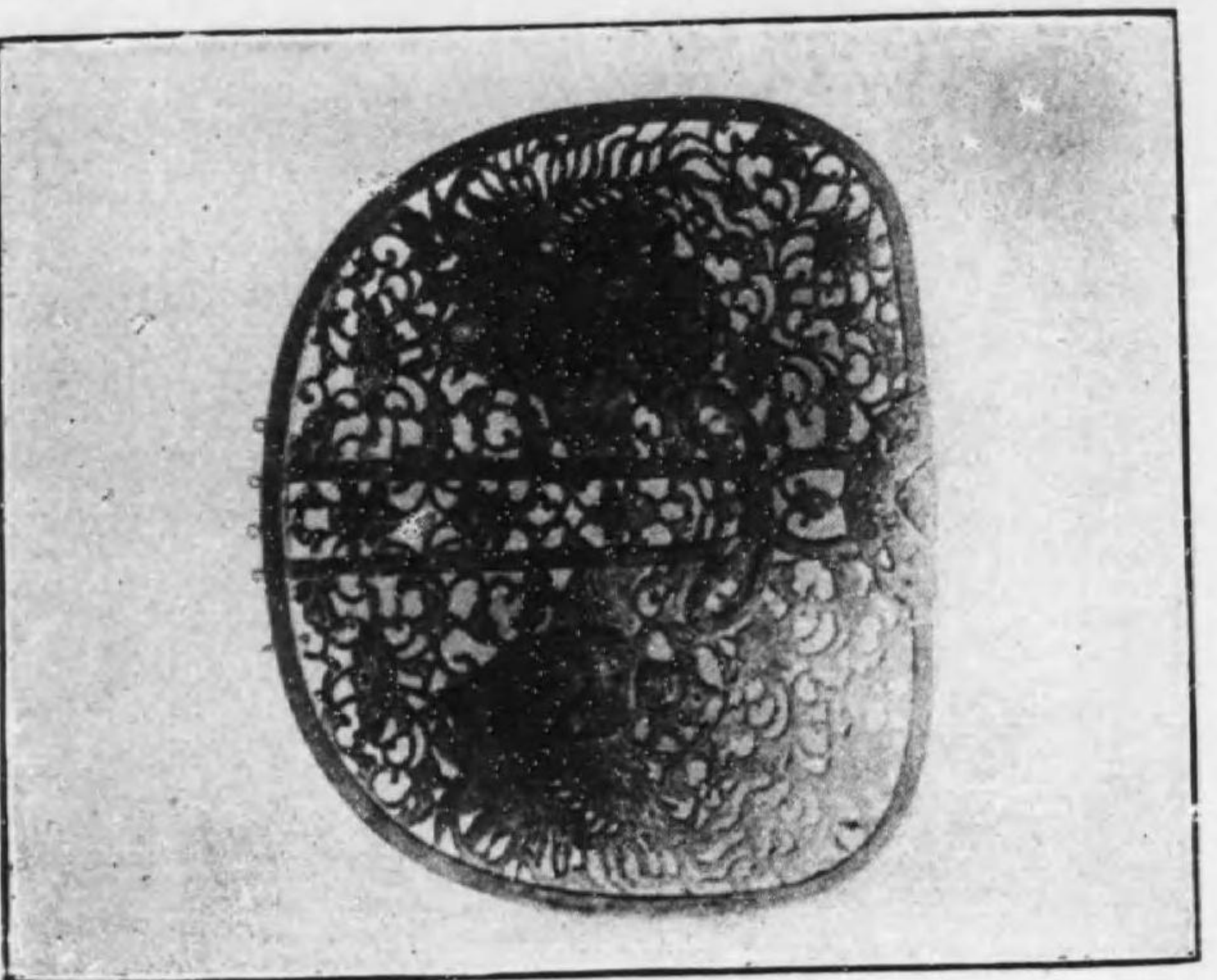
金 色 堂 の 阿 彌 陀 如 來

部内堂色金



細螺部内堂色金





金 色 堂 華 鑿



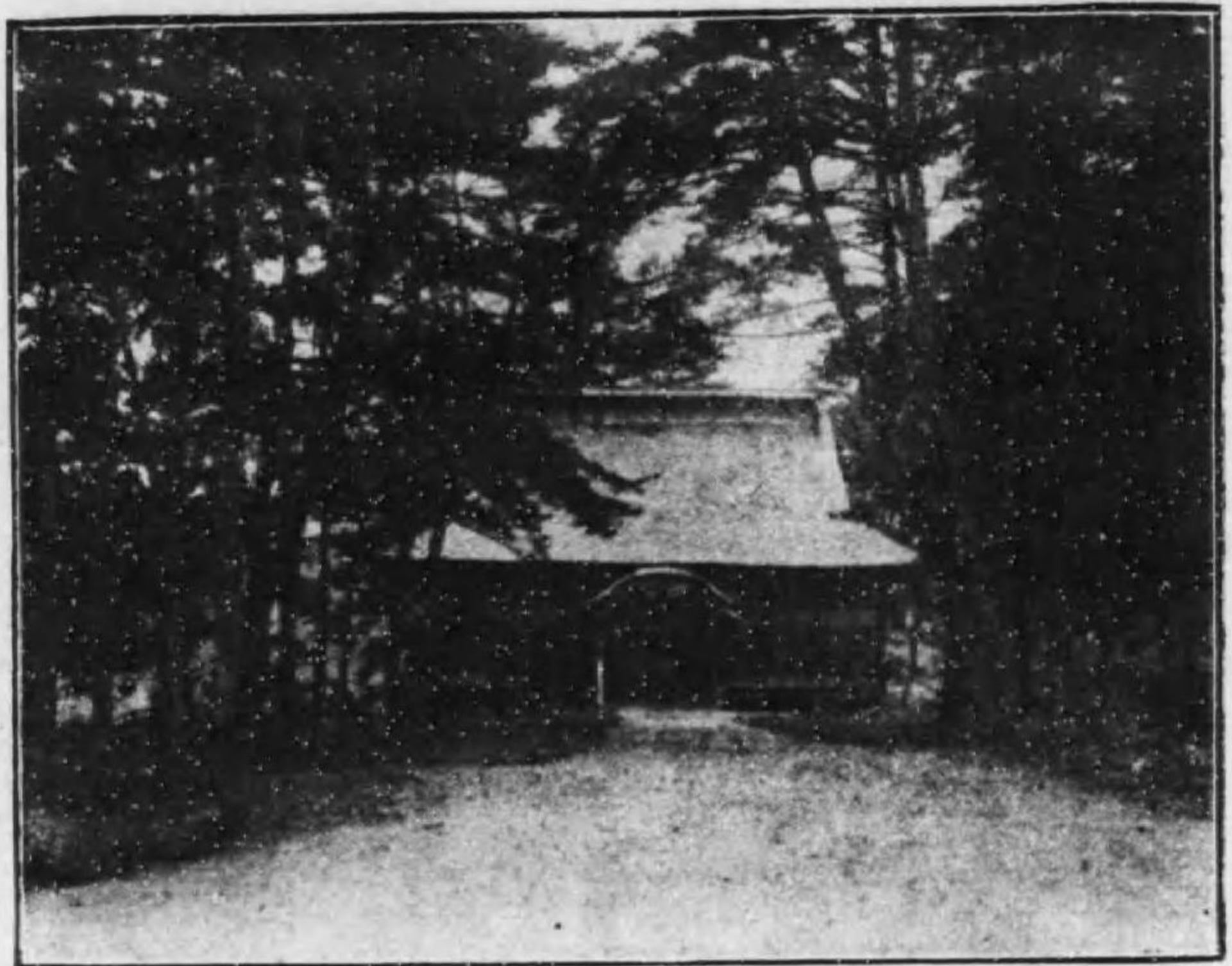
一 字 金 輪 佛



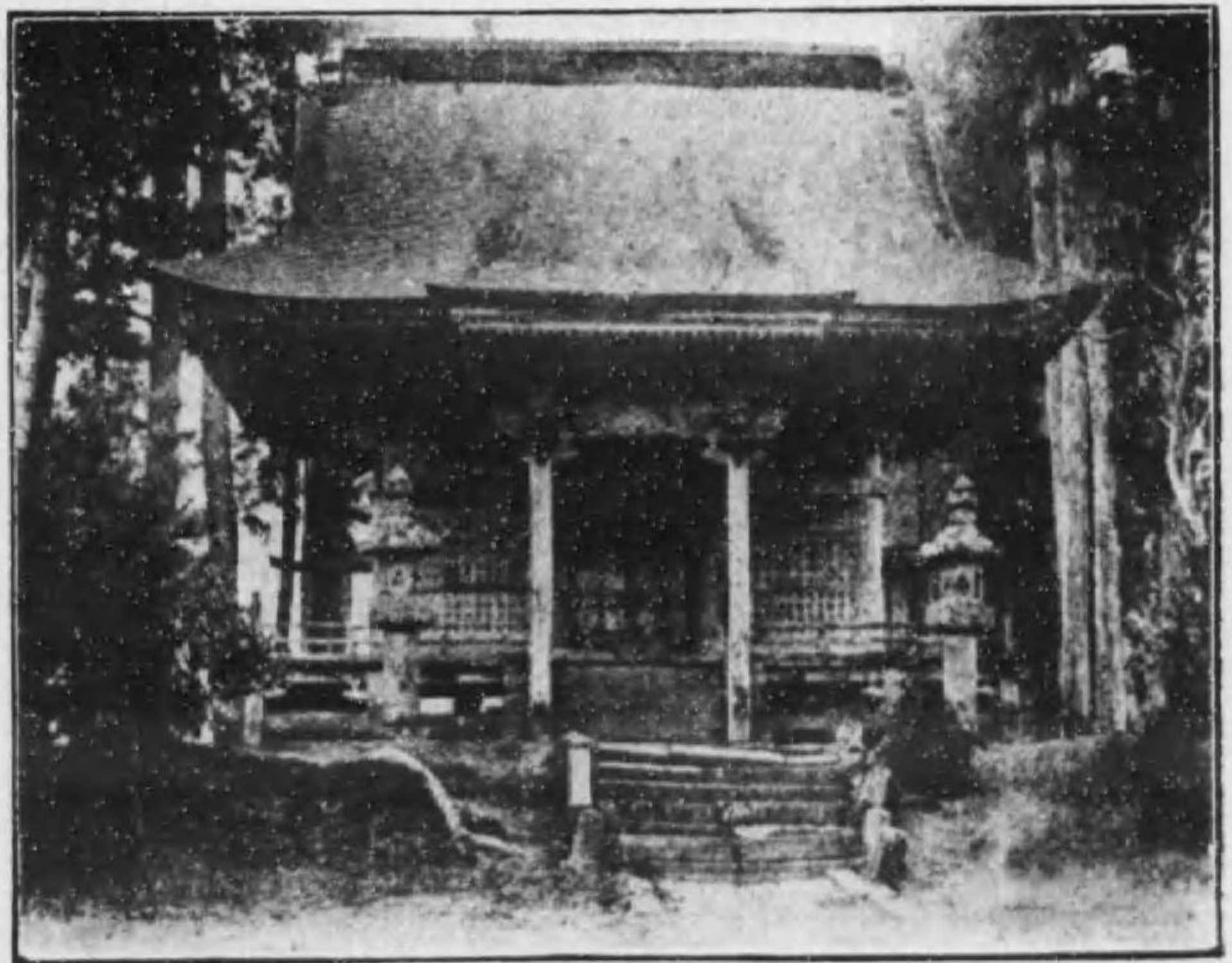
經藏堂の國寶文殊菩薩



經藏須彌壇



寺 越 毛



堂 度 辨

平泉小誌目次

- 一、平泉を中心としたる中古の歴史
- 二、平泉の遺址
- 三、中尊寺金色堂及其の他の堂宇の研究
- 四、毛越寺の遺址





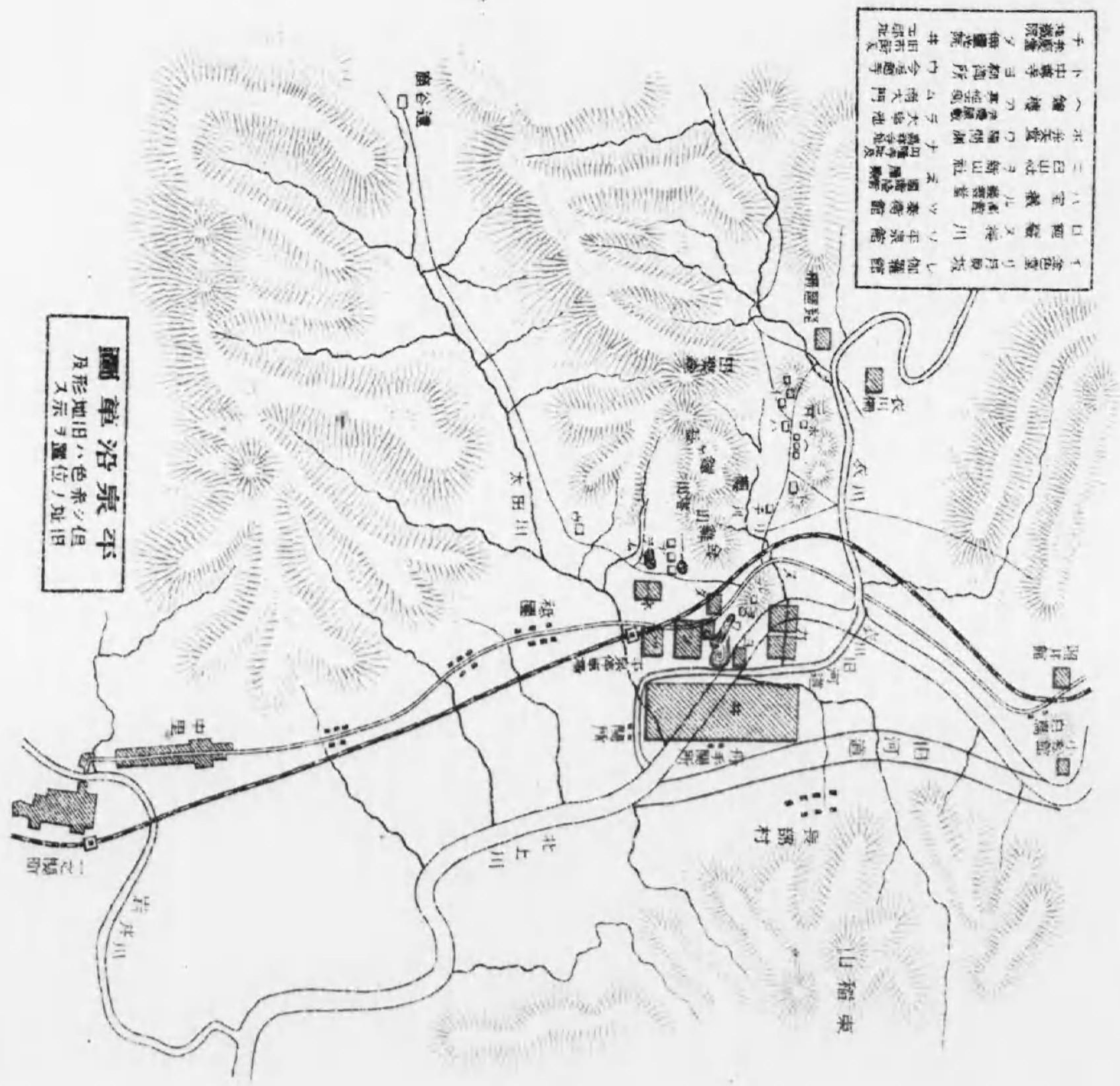
第十卷
第十卷
第十卷
第十卷
第十卷
第十卷
第十卷



第十卷
第十卷
第十卷
第十卷
第十卷

目次終

目次終



平泉宮の月形
 加羅宮
 川ノ正末能
 八定親ノ家
 二日社ノ新山社
 平泉宮ノ御明
 鐘樓ノ東門
 下中寺ノ御池所
 千代宮ノ御池所
 井田石ノ御池所
 工部所ノ御池所

平泉沿草圖
 月形地ノ色赤
 又形地ノ色白

平泉小誌

一、平泉を中心としたる中古の歴史

阪上田村麿が蝦夷を征服せしより、奥羽久しく静謐に歸し、王化次第に普及したり、然るに、京都に於ける藤原氏專横を極め、王綱紐を解きしより、奥羽又亂れ、所謂前九年の役起り東北の地又活氣を呈するに至りぬ。此の時に當りて、安倍頼時あり。世々陸奥に住し一族強大なり。頼時其の子貞任と、衣川柵に據りて叛す。

(柵は今の平泉高館を中心とせる處と見るべし)天喜二年源頼義陸奥守兼鎮守府將軍として之を討ち、茲に前九年の役起りしが、頼義出羽の仙北の豪族清原武則一族の援を得、遂に之を討滅するこ

とを得たり。清原氏功を以て安倍氏の故地を賜はり、奥六郡（膽澤和賀江刺稗拔志波岩手）の押領使となり、鎮守府將軍に任ぜらる。然るに、武則の孫眞衡に至り、同族武衡及弟家衡との間に不和起り、奥羽又亂れしが、寛治元年頼義の子義家（陸奥守兼鎮守府將軍）眞衡を助けて武衡家衡を攻め、茲に後三年の役起りぬ。此の役、眞衡の異父兄弟清衡も始めは眞衡と不和なりしが、中ごろ意を變じて義家に屬し、遂に争亂を鎮定することを得たり。義家即ち清衡を奥州の目代として歸洛す。

清衡は藤原秀卿より出づ。秀卿五代の孫、亘理經清下總より移りて陸奥の亘理郡を領す。安倍頼時の女を娶りてより江刺郡豊田（岩谷堂町の東）に居る。前九年の亂安倍と共に誅に遭ふ。其の妻幼

兒を抱きて清原武貞（武則の子）に嫁す。幼兒は即ち清衡なり。

清衡後三年の役、義家に従ひ功を以て奥州の目代となり、尋て奥羽兩國の押領使兼鎮守府將軍となり、安倍、清原、兩氏の遺領を受け、嘉保年中磐井郡平泉に移る。世之を「奥の御館」と稱す。清衡乃ち盛んに館邸を經營せしのみならず、長治二年勅を奉じて中尊寺經營の工を起し、天仁二年其の功を竣り、結構莊麗なり。其の他寺塔四十餘宇禪房三百餘に及び、宛然奥羽第一の靈場となる。清衡大治五年死し、子基衡嗣く。基衡亦父の業を受け、鳥羽天皇の勅願に依りて毛越寺を經營す。四十餘の堂宇五百の禪房を有し、其の莊麗中尊寺に劣らざりしと云ふ。其の妻女亦歡自在王院を造る。

基衡死して子秀衡亦父祖の志を嗣ぎ堂塔を經營す。即ち嘉祥寺を營み、更に宇治平等院に擬して無量光院を建立せり。三代の經營繁華豊富を極め、山間の僻地一朝にして奥羽五十餘郡の首都となる。而して其の領域は南は白河關より念珠關に及び、北は津輕を含み、富強比なく、而かも上に恭順にして貢租を懈らず。下に慈にして國內よく治まりしと云ふ。

秀衡六男あり國衡、泰衡、忠衡、隆衡、通衡之なり。泰衡家を嗣ぎ、其の他は奥羽の各地に分封す。

藤原氏系圖

秀郷—千時—千清—正賴—賴遠—經清

—國衡西木戸太郎

清衡

基衡

秀衡

—泰衡母ハ民部少輔基成女

權太夫

出羽押領使

從五位下

陸奥押領使

平泉中御館

鎮守府將軍

奥御殿

—忠衡泉冠者

—隆衡本吉冠者

—通衡和泉三郎
出羽押領使

—賴衡錦戸太郎

此の時に當り、奥羽の平穩なるに反し、京都に於ける政變甚急にして、保元平治の亂相續ぎて起り、源家の一族四方に没落す。

義朝の末子義經逃れ來りて秀衡に依る。秀衡好く之を遇す。已にして、義朝の三子賴朝兵を伊豆に起し、勢威頗る盛んにして平軍と富士川に合戦せんとす。義經之を聞き、乃ち秀衡に辭し往て賴朝を助く。秀衡の部將信夫莊司佐藤基治の二子佐藤嗣信及忠信義

經に屬す。義經賴朝を助けて、至る處、平軍を敗り、平氏遂に西海に亡び、天下又事無からんとして義經賴朝と不和を生ぜしかば、義經又來りて秀衡に投じたり。時に文治三年二月なり。

秀衡義經を高館に置き遇すること尙厚し、十月秀衡病革まるに臨み、子弟に諭して曰はく、一家よく義を守り、義經を奉じて大將軍となし、舉國其の命を聽くべしと。已にして秀衡没し、子泰衡嗣ぐ。賴朝即ち策を劃し、泰衡をして先づ義經を圖らしむ。泰衡賴朝を恐れ、父の遺言に背き、五年閏四月晦日遂に義經を高館に襲ふ。義經乃ち妻子を刺して自殺す。地は今の高館の地なり。後天和中伊達侯の家臣某爲に一小堂宇を建つ。之を義經堂（又白旗神社）と云ふ。

泰衡已に義經を殺しぬ。賴朝乃ち泰衡追討の奏請をなし、勅許を待たずして軍を發す。五年七月十九日自ら鎌倉を發し、征討の途に上る。軍を分ちて東海東山北陸の三道より奥州に入らしめ、兵總て三十萬と稱す。泰衡即ち伊達刈田宮城玉造栗原諸郡の城砦の守備を嚴にし、自ら國分原鞭楯に出陣して軍を督す。西木戸太郎國衡二萬の軍を率ゐて伊達郡にあり、阿津賀志山に二重の濠を作り、金剛別當秀綱父子をして之を守らしむ。

八月賴朝白河關を越て奥州に入り、石那坂の戰に佐藤莊司の軍を破り、又其の牙城大鳥城を陥る。先鋒畠山重忠國衡と戦ひ金剛秀綱父子を敗る。十日賴朝自ら阿津賀志山に向ひ接戦して國衡を斬る。泰衡敗を聞て戦はずして去る。賴朝進んで多賀國府に入る。

國內風を望んで争ひ降る。頼朝更に進んで玉造に至り、泰衡を多賀波々の城(玉造郡岩手山町北なりと)に圍む。泰衡城を棄て、走る。頼朝栗原郡三迫の敵を敗り、松山路より栗原郡津久毛橋(栗原郡津久毛村)に至る。泰衡即ち平泉館を火し厨河に退く。二十二日平泉に入る。時に戦後の平泉の状は東鑑に

「杏梁桂柱の構三代の舊跡を失ひ、麗金昆玉の貯一時の薪灰となる。中略。家は又煙と化し、數町の縁邊寂寞として人無く、累跡の廓内彌々滅して而して地あるのみ。只颯々たる秋風、幕に入るの響ありと雖も、蕭々たる夜雨の窓を打つの聲を聞かず云々。」

九月二日厨河の壘を改む。泰衡出羽に走り世臣河田次郎が贊の柵

に入り、遂に河田が爲に殺さる。時に年三十五歳。河田其の首を携へて志波郡陣岡峰の社に至り頼朝に献ず。頼朝其の不臣を責めて之を誅す。之に於て奥州略定まる。

頼朝乃ち葛西清重を陸奥總奉行とし、平泉に居り政務を執らしめ、萬事秀衡の舊制に従はしむ。次て伊澤將監家景を留守職とし、清重と共に政務を見せしむ。其の他功臣を各處に封じ、奥羽靜謐に歸せり。葛西氏後牝鹿郡日和山城に移り平泉は廢墟となる。

内 藤 碧 海

豪奢聞説學帝京、樂曲猶傳當日聲、乃父貽謀留一劍、阿兄誤事破長城、百年陳跡空梵宇、三世遺珍古釋經、奥地如今多感慨、更教弔客動愁情

二、平泉の遺址

抑々平泉の古址は、陸中國西盤井郡にあり。一の關町の北里許、衣川の南に當つて丘陵起伏して、東には北上川流れ、西は峯巒遠く連り、森深く谷幽に、人煙今は稀なる所。茲ぞ七百年前藤原氏三代榮華を極めし遺迹として人の知る所なる。爾來物變り星移り地に滄桑の變あり。北上川が其の河道を變じたるを以て地勢當時と頗る異なるものあるも、記録に依り又古圖に依りて、當時の形勢を接んずるに、北上川は現今の流路より遙に東に偏して東稻山の麓、即ち今の長部村附近を流れたるものにして、諸士の館邸關門及市街は、即ち今の里俗判官館と稱する邊より北上川の流るゝ所に跨りて存在したるが如し。而して今の衣川は、判官館の北に

て北上川に落ち合へども、古は高館の下を流れ北上川と平行し、其の間市街續き家並敷かれて一里餘り下流にて、太田川と合して更に北上川に落ち合ひしものなるべし。

さて此の間、藤原氏三代榮華の跡を尋ねれば、地形上より大略之を三つに分つことを得べし。即ち中央の目標たる所謂金雞山を中心として、其の北なる關山中尊寺即ち清衡が經營せるものを一とし、金雞山の南毛越寺、即ち基衡の經營せるものを二とし、其の東、平泉館及秀衡の經營せる寺堂地（特に無量光院址）を三となすを得べし。

然れども、今巡覽道路の順序に依りて説かん。汽車東北線を北走して平泉の小平野に入れば、忽ちにして東稻山の優姿車窓を壓し

て來り、北上川の清流は前面に横はり、一帶の風景已に凡ならざるを覺ゆべし。乃ち平泉停車場に下り、杖を曳いて國道を進めば、須臾にして荒涼寂寞たる一村落入るべし。因て杖を立て、古圖を出して對觀せば、身は已に古の平泉館址にあるなり。目を上ぐれば金雞山は近く左手に當り。山姿相異ならず、自ら往昔を語らんとするが如く、何となり旅情の身に泌み渡るが如し。芭蕉翁が奥の細道に「三代の榮耀一睡の中にして大門の跡は一里こなたにあり、秀衡が跡は田野になりて、金雞山のみ形を残す」と。此の平泉館は、清衡、基衡、秀衡三代の居館にして世に「奥の御館」と稱せられ、又伽羅御所も其の西北に連りしものにて、今猶御所屋敷と稱し、皆今國道の左右にありて余等の道に當れり。

平泉館址

牧 山

滄海桑田一夢中、幾人到此感何窮、琵琶柵破英名在、楊柳營荒
霸業空、堰外煙斜芳草雨、路傍花落野棠風、無情家是衣川水、
日夜溶々去向東、

平泉館の西に無量光院址あり。秀衡が宇治平等院に摸して造營せしものとぞ。今は總て田圃となり、其の間に礎石庭石等稀に残れり。其の東北(國道の右)一帶の低地、今蘆荻茂生せる處は猫間淵の跡なるべし。當時依て以て園地の眺めとし、兼ねて要害としたる所なり。此を隔て、北に高館山の東に接して低く柳御所址あり。嘉保元年清衡が始めて之を築きて以て其の居館と爲したるものとぞ。

更に再び目を西南に轉ずれば金雞山目睫の間にあり。こは秀衡が其の象を富岳に擬して之を築き、黄金の雞の雌雄をつくりて山上に埋めて以て平泉の鎮護となしたるものとぞ。俗歌に曰はく

朝日さし夕日輝く木の下に漆萬盃こがねおくく

かくて平泉館址の間を過ぎ盡せば、路傍の古松逶迤として左右に並木をなし、三五の行客其の下を行く様、風趣畫くが如し。唯看る右方鬱蒼たる一帯の丘陵あり、人をして先づ其の古址なるを思はしむ。是即ち高館址なりとす。

高館又判官館とも云ふ。源義經が居館にして、且其の最後を遂げたる地なりとす。今細徑を田間に求め、漸く其の丘陵に登れば、樹木翳鬱として晝猶暗く、壞殘せる石礎を踏み、辛うじて登り盡せ

ば、一帯長方形をなせる臺地にして、南面即ち國道との間は低濕にして埴渠の跡を留め、北面は北上川の浸蝕する處となりて斷崖數十丈をなす。臺上に新神社及義經堂あり。義經堂は又白旗神社と云ひ中に義經の座像を安置す。今草苔を排し、倨して觀望すれば、北上川の洪流洋々として來りて脚下に迫り、川を隔て、近く東稻山の蒼々に對すべし。山勢突兀山家林間に隱見せり。昔時秀衡が京都の東山に擬し、滿山の櫻花爛漫として、河水に影ぜしとぞ。

山家集

みちの國ひらいづみにむかひてたばしねと申す山の侍りこと木はすくなきやうにさくらのかぎりみえて花の咲たるをみてよめ

る

西行法師

は、きゝもせずたばしね山のさくら花よしの、ほかにかゝるべしと

更に目を放ちて遙かに北上川の上流を溯望すれば、一條の素練杳冥の間に起り、二三の輕舟之を往來するさま、人をして轉た懷古の情に徘徊せしめ、停立願望容易に去るに忍びざらしむるものありて、眞に平泉第一の好景と稱すべし。平泉誌の記する所によれば、此の高館の臺地の廣さ、東西四百六十間、南北百三十間、高さ五十間、其の東北に館門あり、士邸あり、市街に續きしものなるも、北上川の流域年を超えて次第に變じ、其の流溢の力は臺地

正門のありたる地を全く崩壊し盡し、以て今日の如き狹隘なる形勢を爲すに至りしなりと。

さて高館を辭し、更に再び本道に出で、鐵路を横斷すれば、蕭疎たる數軒の村家相連り、其の極まる處より少しく傾斜せる坂路を登るべし。之を月見阪と云ふ。一帶の老杉鬱蒼の中を行けば身は已に中尊寺境内の人となるべし。

三、中尊寺金色堂及其の他の堂宇の研究

抑中尊寺は、仁明天皇の嘉祥三年慈覺大師の開基にかゝり弘臺壽院と稱せしが、神佛混淆の結果白山宮日吉社も地主權現として此の時建てられけん。其の後清和天皇の貞觀元年始めて中尊寺の號を賜はりしが、堀河天皇の長治二年藤原清衡更に當寺を經營し、

天仁二年始めて工を竣へ、其の後基衡秀衡の經營により堂塔四十僧坊三百餘に及び、其盛んなること眞に當時海内屈指の靈場となりしとぞ。後藤原氏滅亡の際にも幸に兵火を免れしが、惜しむべし建武四年野火延焼して堂宇盡く烏有に歸し、僅かに經藏と金色堂との二字を残したるのみ。

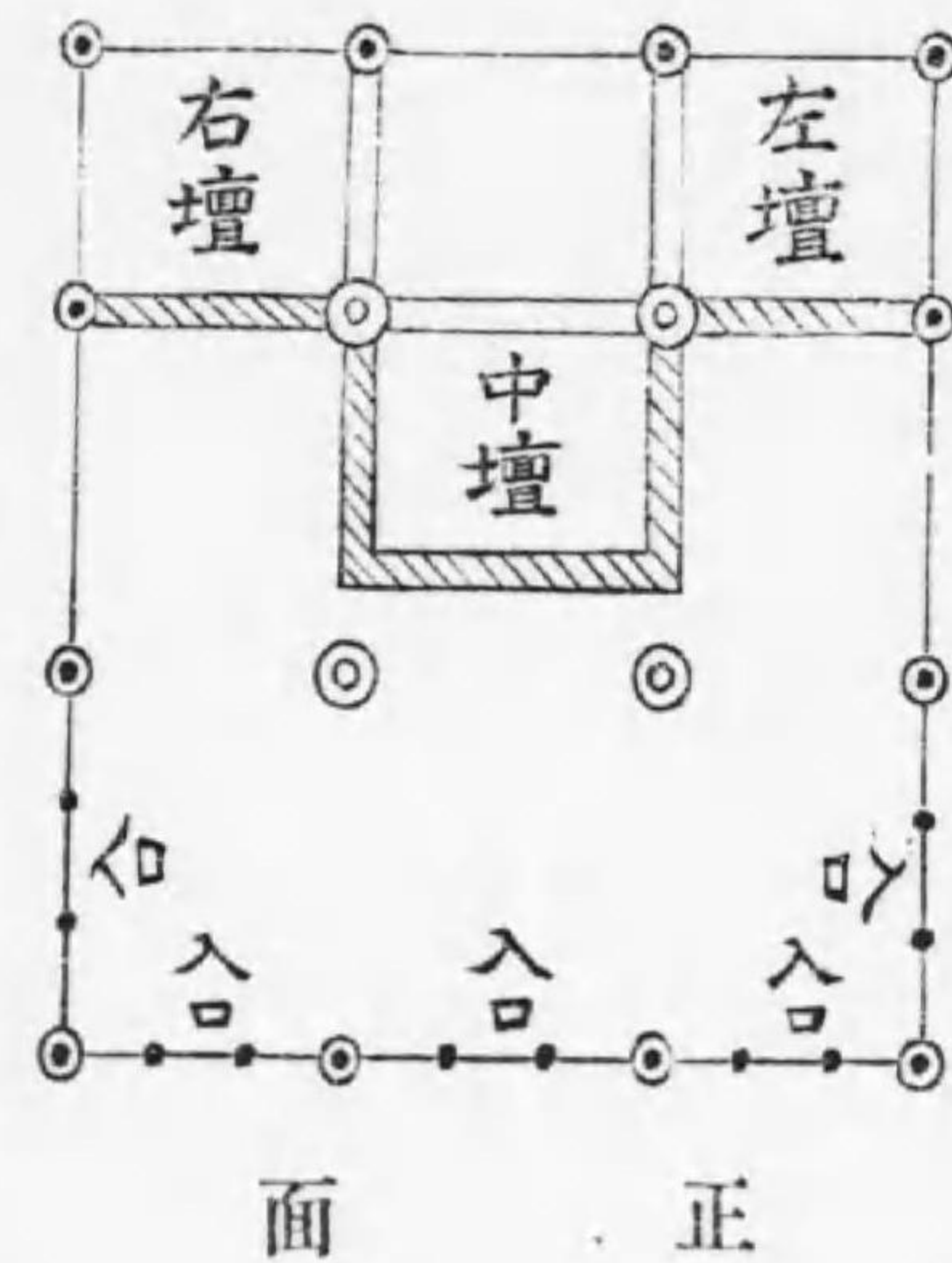
かくて杉樹晝暗き處を登り數町にして道の左側一小堂宇あり、辨慶堂と云ふ。辨慶の立像を安置せり。其の後に地藏院あり。其の寶什は多く鎌倉時代のものにして見るべきものあり。建長二年の銘ある銅製の磬あり。鎌倉彫の笈あり。辨慶所持と傳ふる獨鈷あり、秀衡所用の椀あり。中尊寺毛越寺一山祭禮の圖あり。皆珍とするに足るべし。

尙進めば、蕭々たる寺門道の兩傍に現はれ來り、遂に金色堂、經藏等の保存せられたる一帶の平地に達す。

金色堂Ⅱは藤原清衡が鳥羽院の勅願を奉じて天仁元年他の諸堂と共に建立せられたるものにして、前後十六年を費して天治元年八月二十日に成りしものなり。(棟札に依る)其の金色堂と稱するは、堂の上下四壁内殿悉皆金色に塗れるを以て金色堂と呼び、其の光耀くによりて俗に光堂とも稱す。其の結構は三間四面左右廊二十二間を有し、所謂寶形(方形とも)造りにして、軒は二軒をりなせり。組物は所謂三斗組と稱するものにして、組物間には大なる墓股あり。本墓股とて股を開きしものなり。

其の内部中央に内陣あり。其の組物も亦三斗組にて本墓股を用ふ。

外陣は天井なくして化粧屋根裏なれども、内陣の天井は、所謂折上小組格天井アゲコクミガウテンジヨウ（小組は方二寸ばかり）なり。下には即ち三個の須彌壇ミツノミツノミを構へ、（上圖）壇は金銅の



像（俗に十二光佛）を梨子地の上に、研出し蒔繪に作れり。像は各々金銅（鍍金青銅のこと）の光背を有し、光佛を描ける段と段

彌壇を構へ、（上圖）壇は金銅の金具と螺鈿の華文とを以て裝飾し中壇四隅の柱は所謂七寶莊嚴シツパウサウゴン蒔柱マキバシと稱し、鍍金青銅の繩ツナを廻らし繩には丸き鋳ヒヤウを打てり。其の間三段には、一段毎に四方に一軀づつ、十二軀の胎藏界大日

との間には、螺鈿を以て寶相花をあらはせり。柱脚には藤原時代の特色たる、逆蓮の礎盤あり。

内陣の桁、梁、長押、頭貫、鴨居、組物、臺股及壇の勾欄等は、皆平目地の上に螺鈿にて寶相花をあらはせり。正面の螺鈿には毛彫ケボリを施し、又頭貫鴨居等の中央には金銅に寶相花を透彫スカンボリにせる金具を附し、其の中心には珠玉を嵌したり又内陣の天井には、一面に金箔を打ち、格椽の交錯せるところには十字の金具を附し、其の中心には又珠玉嵌入の痕を見る。

更に堂内の佛像及諸裝飾具につきて一眇せば、三個の須彌壇には各十一體の佛像あり。即ち本尊は阿彌陀佛、脇侍は觀音、勢至、外に六地藏、多聞天、持國天なりとす。（東鑑に阿彌陀三尊二天六

地藏は定朝之を造るとあり)

須彌壇の裝飾及其の勾欄コウランは、左右二壇のは殆んど等しく、中央壇は少しく異れり。壇の羽目ハメは皆金銅にて、孔雀と花木とを打出せり。格狭間ガウザマの周圍は、中央壇のは、金銅にて花木と蝶とを毛彫にて現はせり。左右壇は梨子地の上に螺鈿を以て寶相花唐草蝶の模様をあらはせり。壇の上下貫スキ及束ツカも、中央壇のは青銅板にて寶相花葉を毛彫にてあらはし、花紋の中心には珠玉を嵌入せし痕を存す。左右壇は梨子地に螺鈿を以て寶相花唐草を施せり。又貫スキの處々に寶相花を透彫にせる金銅の金具を打てり。要するに中壇は金銅が主として、左右壇は螺鈿を多く用ひしは注意すべし。尙三壇は二個づゝの華鬘ケマンを懸け、何れも鍍金青銅にて、寶相花の

間に迦陵頻伽カリヨウヒンガをあらはせる透彫なり。

金色堂は覆ふに套堂サヤドウを以てす。套堂は正應年間將軍惟康親王の命に依りて造りしものにて、正應元年十月の棟札あり。本堂に比して餘りに小なるが爲に、外觀甚不釣合ひに、内部亦狹隘にして觀察に不便なり。而かも金色堂の今日に至るまで、其の破壊剝落を免れたるは全く此の套堂の賜なりとす。

堂を出づれば其の傍に碑あり。芭蕉翁の句を刻せり。

五月雨の降り残してや光堂

更に轉んじて背後なる經藏に至るべし。

經藏——經藏は天治元年の建立なり。木造にして六尺二寸間方三間二階瓦葺なりしが、建武四年の野火にて上層を焼く。長押等に

焼痕の残れるを認むべし。今は單層なり。其の組物は舟肘木フナヒヂキにて内部の天井は折上格天井なり。四壁に壁畫を施せる由なれども、今は慥かには見えず。此の天井内陣の柱は後水尾天皇の改造なりとす。

内陣三方に八段の經架あり。經架の軒先ノキサギに半花瓣を横に連ねたるが如き造りあり。經架を支ふる柱の頭部に蓮瓣を附す。經架には藤原氏父子三代奉納の一切經を藏せり。其の清衡の奉納せるは、紺紙に金銀泥交りの書にして、比叡山自在坊蓮光の奉行にて八年を費して書きしものとぞ。一卷毎に口繪あり。經を入れる、に匣を以てす。匣は廣さ七寸、長さ一尺五分、高さ三寸三分、黒漆にして、蓋と身とに螺鈿を以て經卷の題目を鏤めたり。匣の數二百六

十六、現今經卷と共に國寶たり。基衡のは、紺紙に金泥の書にて之も箱に盛れり。

秀衡の納めしは宋版なり。之を盛れる白木造の唐櫃あり。

内陣に八角の須彌壇あり。八面の羽目は皆金銅にて、迦陵頻伽を打出せり。八角の角にあたる束には螺鈿にて鈴鐸及散蓮花をあらはし、貫の角の所は金具を張り、三鈷を打出せり。貫の中央にも亦螺鈿にて三鈷及散蓮花をあらはせり。此の正面の螺鈿には更に毛彫を施し、光澤殊に美はし。今國寶なり。

須彌壇上には、鳥羽天皇より賜ふ處と傳ふる獅子に駕せる文珠菩薩像を安置す。右に于闐王獅子ウチンの轡を把りて進み、太上老人拂子ホッスを手にして其の後に立ち、左には善哉童子ゼンサイ一匣を捧げて従ひ、佛ブツ

陀婆里^{ダバリ}は錫杖を執りて後にあり。尙右壇の傍に千手觀音二十八部衆の白壇像^{ビヤクダン}を安置せり。此の外の寶什には、燭臺、禮盤、机、寶塔等見る可きもの多し。

經藏を出で、一泓の池水を渡れば、其の中島に辨財天堂あり。

辨財天堂||此の中には安阿彌作の本尊及び十五童子を安置せり。

金光明最勝王經十界曼荼羅^{マンダラ}あり。竪四尺六寸、横一尺七寸、總て十幀あり。經文を紺紙に、金泥の細字にて、十界寶塔を頗る鮮明に圖せるものなり。其の塔の左右には、經意説明の極彩色の繪あり。之を容れたる厨子及其の戸帳^{トヤウ}は伊達綱村朝臣の寄附なり。今國寶なり。

其より再びもとの道に出づれば、右に寶藏あり。

寶藏||寶藏には中尊寺附屬諸寶什を藏せり。中につき貴重なるは、一字金輪佛^{イチジ コンリンブツ}とす。像は木彫半肉彫の坐像にして、身の丈二尺三寸八分、玉眼を入れたり。頭には五佛冠を戴き、手に智拳印^{チケンイン}を結び、蓮坐に座せり。其の容姿瑞嚴微妙にして而も骨格肉置等の圓滿精巧なる、所謂如來の七十二相八十種好兼備はる、實に溫乎として生人に接するが如し。俗に之を生肌大日^{イクハダノダイニテ}と稱し、藤原時代彫刻美術の模範とすべきものなり。連慶の作なりと傳ふ。國寶なり。

其の他莊嚴幡頭三つあり。金銅透彫にて寶相花の模様をあらはせり。天蓋^{テンガイ}(金色堂内のもの)二あり。木彫半肉彫なり。其他地藏光背六あり。金色堂佛像蓮座破片あり。磬^{ケイ}あり。皆珍とすべきものなり。

のなり。中にも、唐木造御輿形の舍利寶塔あり。其造構、二軒、三斗組、本臺股（細して曲線も程よし）を用ひ、臺は三分し各々金銅の羽目を有し、銀象箆を用ひ、其の格狭間の模様は、銅製鍍金に毛彫にて孔雀の二羽相對せるものなり。此の臺の貫束には、透彫にて唐草をあらはせる金具を張れり。其の他諸種の圖幅には、平泉古圖あり。中尊寺毛越寺全盛圖あり。皆珍とするに足る。昔頼朝の伐ち入りし時、四代の居館皆灰燼に歸したるが、一倉庫の残れること東鑑に

「但し坤角に當りて一字倉廩あり。餘焰の難を遁る。萬西三郎清重小栗十郎重成を遣はして見せしめ給ふに、沈紫壇以下唐木厨子數脚在り。其の内納るゝ所の者に、中玉犀角、象牙笛、水牛

角、紺瑠璃等笏、金沓、玉幡、金華鬘（玉を以て飾る）蜀江錦直にして縫はざる帷、金鶴、銀造瑠璃灯爐、南廷百（各金器に盛る）等なり。其の外錦繡綾羅愚筆記す可らず云々」

此の中唐木厨子數脚云々とあるものは舍利寶塔のことならんか。寶藏を出で、左往右還舊址を此の間に求むれば、曰はく多寶堂曰はく三重塔址、曰はく何、殆んど枚擧に暇あらず。更に來路を取り山を下り、先きの高館山前より右折間道に入れば、數町にして毛越寺を訪ふ可し。

四、毛越寺址の探訪

毛越寺——毛越寺は金剛王院醫王山と稱し、一山の總名にして金堂圓隆寺、嘉祥寺を含みしものあり。其の創設は嘉祥三年中尊寺

と同じく、慈覺大師の開基たる嘉祥寺を建てたるを創めとす。堀河天皇の勅願によりて、基衡更に寺堂を經營し寺領を寄進す。かくて堂塔四十余宇禪房五百余に及び、鳥羽天皇之に圓隆寺の號を宣下あり。而して其の結構の莊嚴なる、金銀珠玉燦として人目を眩し、其の裝飾の美善を盡せる、殆んど本邦中之に比すべきものあらざりしとぞ。東鑑に

「堂塔四十余宇、禪房五百余宇、基衡之を建立す。先づ金堂を圓隆寺と號す。金銀を鏤め、紫檀赤木等を繼ぎ、萬寶を盡し衆色を交ゆ。本佛は丈六藥師十二神將（運慶之を作り、佛菩薩像玉を以て眼に入る事此時に初まる）を安置し、講堂、常行堂、二階、總門、鐘樓、經藏あり。九條關白家御自筆を染めたる額を下され

參議教長卿堂中の色紙形に書す云々」

文治五年頼朝の泰衡を亡すや、即ち寺領安堵の壁書を圓隆寺南大門に掲げしめ、更に修營の命を下して其の舊觀を保持せられしが後堀河天皇の嘉祿二年十一月火災起り、堂宇盡く延焼す。其の後繼絶興廢の擧ありしも、風雨幾百年今は唯常行法華の二堂を留むるに過ぎず。其の大金堂圓隆寺址は、今の常行堂の東にあり、今僅かに存する徑五尺餘の礎石四十九と、其の周圍の巨石とは其の寺城の如何に巨大にして、其の寺觀の如何に壯大なりしかを察するに餘りあり。南大門の東端國道の左に芭蕉翁の句

夏草やつはものどもが夢のあと
を刻せる碑あり。

寺境を出で、一帶の平野を觀望すれば、天高く雲遠く山河依々と
してあり。若し其れ秋風高く落葉疎々たるの候、來りて此の地を
訪はゞ、愁人ならざるも亦感慨百端殆んど斷腸の思ひに堪へざる
べし。芭蕉翁が奥の細道に「國破れて山河あり、城春にして草青
みたりと、笠打敷て時のうつまで涙を落し侍りぬ」とあり。

大槻 磐 溪

三世豪華擬帝京、朱樓碧殿接雲長、唯今唯有東山月、來照當年
金色堂、

同

一宮楊柳是平泉、掌握二州兵馬權、上國戰塵飛不到、春風占斷
九十年、

同

管月絃風鎮奧州、餘音嫋々託緇流、一聲龍笛傳家秘、吹起三衡
全盛秋、

平泉小誌終

大正二年五月十日印刷
大正二年五月十三日發行

平泉小誌奧付

著者兼發行者 渡會連藏

印刷者 淺野榮作

印刷所 東京市芝區愛宕町三丁目二番地
東洋印刷株式會社



發行所

東京市日本橋區本町三丁目十七番地

金港堂書籍株式會社

274
117

終

